

手を結んで難関を克服しよう

王 晟旭

wangshengxu

一葉落ちて天下の秋を知る。秋の到来とともに、熊本県の市木としての銀杏の黄葉が、天高く馬肥ゆる秋の秋容を構成するには欠かせない綺麗な景色なのではないか。昨年の十二月末から爆発したコロナ禍は、現在までみるみるうちにほぼ一年を経た。この一年間、このコロナ禍がまるでダモクレスの剣のように世人の頭から離れず、言うまでもなくこのコロナ禍の影響力は巨大で、世界各国の経済を低迷させて数えきれないほど多くの国民がコロナ禍より死亡した。ウイルスの面前に先進国であれ、発展途上国であれ、大統領であれ、平民であれ、すべては平等で、急速に全球が崩壊の窮地に落いった。もちろん、我々留学生も同様で、毎日もびくびくしながら日を過ごしている。留学生にはパートタイムのショップが閉店したために働く機会が失われ、新しい仕事を見つけるのが非常に困難となったため、生活費の一部が失われた。併せて同時に学業の配慮をする必要もある。一方、帰国の道も極めて困難であり、疫病が始まったばかりの数ヶ月の間には各国間の通航がほとんど欠航し、ここ数ヶ月は限られた都市間で限られたいくつかの航路が開かれていたが、航空券の料金とその他の費用を合わせても小さな数字ではなく、しかもその旅程でウイルスに感染する危険がある。だから実は一般人より一人で見知らぬ異郷に流れ着いて住んでいる留学生の境遇がもっと大変であるとはいえる。しかしながら、中華人民共和国政府や日本国政府は我々留学生のことを忘れずに色々な援助を我々に提供してくれた。まず四

月の時日本全国のマスクの在庫が深刻に不足していた状況で、中華人民共和国駐福岡総領事館は熊本県に滞在している中国留学生たちにマスクや薬を提供し、ウイルスに感染されるリスクは大幅に軽減した。それに日本国政府、熊本県政府、私の留学先熊本県立大学は同様にタイムリーに支援に乗り出し、続々と無私の援助と真摯な支持を届けてくれた。中華人民共和国政府や日本国政府の援助は本当に雪中に炭を送ることであり、私たちはまさに両国政府の配慮のもとで、最も困難な時期を乗り切った。私はこの恩情を肝に銘じて、恩返しができるよう努力せねばと思う。中日の仏教交流史上にはある逸話があり、日本の長屋王はかつて袈裟を縫って袈裟の縁に「山川異域 風月同天 寄諸仏子 共結来縁」という偈頌を刺繍した。そして唐の高僧に送った。この物語から中日の友好関係が明らかになった。私は留学生として未来に中日交流に関する仕事に従事したい、日本からいただいた恩情を中国のみんなに伝えよう、中華人民共和国と日本の絆を一層にしようと思う。さて、我々は手を結んでコロナ禍の難局を乗り越えて来年一緒に弥生で花信風を迎えよう。